

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 28 年 5 月 16 日

所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生 2 年
氏名	齋藤 美保

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
アメリカ・シカゴ
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
シカゴ渡航 (John Doherty 氏との面会・動物園の見学・キリン会議出席)
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 28 年 5 月 8 日 ~ 平成 28 年 5 月 15 日 (8 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
Chicago Zoological Society
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の出張の目的は 3 点あった。一つ目は長年野生キリンの研究をされている John Doherty 氏と面会し、キリン研究についての意見交換を行うこと、二つ目はシカゴに二つある動物園：リンカーンパーク動物園とブルックフィールド動物園を訪ね、アメリカの動物園における動物の展示方法、運営面での日本との違いを学ぶこと、最後の目的は International Giraffid Conference に出席しポスター発表を行うこと・アメリカのキリン飼育の現状を学ぶこと、であった。
<b>① Doherty 氏との面会</b>
Doherty 氏は調査地であるケニアの Soysamburu conservancy に生息する約 80 頭全てのキリンの個体識別をされているようだ。その個体識別調査のデータ表を見せて頂くことができたので、今後自身の個体識別表を作成する際に、参考にさせて頂こうと思う。また、彼の調査地を一度見に来たら良い、と言って頂いた。今回の面会を通じていい関係性を作ることが出来たので、それを無駄にせず今後活かしていきたい。

写真 1 : Doherty 氏と学会会場にて
<b>② Lincoln Park Zoo/ Brookfield Zoo の見学</b>
日本の動物園と大きな違いを感じた点は、ボランティアの方が大勢いることだった。若い方から年配の方まで様々な年齢層の方がボランティアをされており、どの展示動物のコー

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

ナーにもボランティアの方がいた。その中の一人の方に伺ったところ、リンカーンパーク動物園だけで約 300 人のボランティアの方が登録されているようだ。ボランティアの方の協力もあり、リンカーンパーク動物園は入場料無料で運営されている。日本にもボランティア制度はあるが、日本の場合、彼らの多くはふれあい動物園に配置されており、個々の動物の展示場所に配置され、かつ動物に関する詳しい解説を行ってはいないように感じる。アメリカのように活発なボランティア制度があることで、来園者に動物に関する深い知識を持ち帰っていただけるし、ボランティアの方も動物園にさらに愛着がわき、“市民も運営に参画している動物園”というポジティブなイメージを持って頂けるだろう。

もう一点日本ではあまり見ない光景だったのが、ホッキョクグマが芝生の上で寝転んでいる光景であった。日本であれば、ホッキョクグマの放飼場は流氷や冰山を模したものが多いため、芝生の上に寝そべっているホッキョクグマを見るのは新鮮であった。確かに、ホッキョクグマが生息する地域は流氷が広がっているが、ホッキョクグマにしてみると、流氷を模した固いコンクリートよりもふかふかの芝生の方が寝心地がいいのでは、と感じた。

リンカーンパーク動物園では新しいニホンザルの展示施設が一年前にオープンしたそうで、現在三頭の赤ん坊がいた。放飼場は緑豊かで、来園者も見学できる場所に研究のためのパソコンルームが設置されていた。動物園の門に入ってすぐの好立地に、このような快適な環境を整えてもらっていることを嬉しく感じた。



写真 2 : 芝生の上で休息する  
ホッキョクグマ



写真 3 : リンカーンパーク動物園の  
ニホンザル放飼場

### ③ International Giraffid Conference 参加

今回の学会にはアメリカの多くの州からキリン・オカピの飼育係の方が参加しており、アメリカでのキリンの飼育方法についてたくさんのことを学ぶことが出来た。キリンの飼育を行うにあたって、アメリカの動物園では日々のトレーニングが当たり前に行われているようだ。また、トレーニングではキリンを特定の場所に移動させるだけでなく、足を台の上に置かせて、蹄の裏のケアまでも行っているようだ。日本の動物園ではトレーニング自体少数の園でのみ実施されており、またトレーニングを行っている園でも蹄の裏のケアまではなかなか実施できていないようだ。

一方、学会に参加していたドイツの動物園の学芸員の方の意見を聞いてみると、ヨーロッパではイギリスを除きキリンのトレーニングはほとんど実施されておらず、トレーニングの必要性もあまり感じていないようだ。アメリカとヨーロッパでトレーニングの実施状況が大きく違うことに驚いた。私は実際に飼育を行っている立場ではないので、どの方針がいいかは言えないが、今回の場で得た情報を今後日本の飼育現場に伝えなければいけない、と感じた。

学会には、オカピの飼育係の方も参加していた。オカピは非常に繊細な動物だと聞いていたが、アメリカではどの動物園でもオカピの飼育スペースに飼育担当者が一緒に入り、トレーニングのために体を触ったり、妊娠検査のためにエコーを取っていたりした。そのような報告を聞いていると、オカピが繊細な動物だと全く感じる事がなく驚いた。

動物とそのような関係を築くことは、動物が病気になった際や事故があった際、それらの事態に、いい関係が築かれていない場合に比べ、より対応しやすくなるのではないかと感じる。



写真 4：学会の様子

### 6. その他 (特記事項など)

本実習は PWS リーディングプログラムの援助を受けて行いました。プログラム関係者の皆様に感謝申し上げます。